

風景デザインレター from 九州(第 18 号)

ついにあの風景デザインを考える際の重要な名著イフ・トリアンの「トポフィリア」の登場です。そのわりには、内容の薄い駄文ですが、少しづつ、具体論を考えねばと思っている今日この頃です。

イフ・トリアンの「トポフィリア」を拾い読みしながら

計画のない計画論(続き)

【自律的な行動を支えるもの】

前回、風景デザインを考える際に必要なのは、市民の自律性であり、上から目線の計画論ではないのではないかと書いた。ただ、市民活動の段階がほとんど未成熟な我が国において、市民の自律性のみを頼ることは当然うまくいかないであろう。そこで触媒としての専門家というものを提言したわけであるが、その触媒の役割については十分に考察しきれていなかった。そこで、再度考えてみる。

時代は、1960 年代の「量の時代」から、1980 年代に「質の時代」移り、さらに「個性の時代」へと移って来た。1990 年段階では、十分に質の問題がクリアされ、個性の時代に入ったというよりは、質を上げるという中に個性という要素を加味すべきという「質」の内容に対する考えが加わったことであろう。そして 2010 年の今、求められているのは、「連携」「共助」「共生」などのネットワークである。この連携等の考えは、地域レベルでの個性あるいは独自性という、それぞれの地域の魅力や役割を十分に認識したうえでなければ成り立たないので、「連携の時代」「共生の時代」は、社会的な役割分担の明確化の時代、あるいは自分たちの地域の再認識の時代と言い換えていいかもしれない。今回紹介したイフ・トリアンの「トポフィリア」には、1975 年発行の 35 年も前の書籍であるが、この場所の持つ個性の成立要因と、周辺とのかかわりについて、世界各地のモデルケ

ースを参考に記載されている名著である(アジアの対象を日本でなく中国にしているところは残念ではあるが)。場所、あるいは地域の個性を生んでいるのは、その場所の地形や自然環境の総体としての風土であり、刻まれた歴史であり、住んでいる人々の宗教性のような思想・考え方・生きざまやマナー・習慣であり、生活や生業の在り方である。そして、地域の風景というものは、これらの総体として表出しているということである。

このように考えると、日本の抱える問題というものは、まず気になるのは、地域や場所の区切りの問題ではなからうか。交通の便が良くなったということもあり、また、市町村合併による行政的な区切りが膨張していることもあるが、その区切りの不明確さが、風景の不明確さにも表れてきているような気がする。先日、熊本の棚田セミナーで講演されたフランスの景観デザイナーも話していたが、フランスの行政単位は、結構細かく、かつ、歴史的にも変わっていないということだ。例えば、「福岡」というのは中央の天神周辺なのか、博多駅周辺・西新周辺を含む範囲なのか、周辺の住宅地を含む範囲なのか、あるいは福岡県全域、北部九州をさすのか、その都度、意味合いは異なる。このニュースレターの第 1 号に書いた「福岡らしさ」「筑豊らしさ」等の地域らしさをどうとらえるかという時の基本条件の設定の仕方の問題である。また、逆に、場所ということであれば、コミュニティ単位の小学校



区と、町内会単位、あるいは、隣 3 建のお隣さんレベルなのか。ヨーロッパや中国のように城壁で囲まれて都市が成立している地域とは異なり、人は生垣といわれるような核に城があるもののだらだと城壁という明確な境を持たず成立している日本の都市とは、まとまった地域という発想には乏しいのかもしれない。我が国の場合、コミュニティとしてのまとまりは意外とぼやけていて、特に、都市部では、コミュニティそのものが存在しないあるいは崩壊しているようなところもあるし、あっても、子供を中心とする P T A 母親コミュニティであったりする。

しかし、地域づくりという視点から見ると、当然、地域が「個性」を持ったり、地域同士が「連携」するということの前提には、その要素としての地域区分、地域としてのまとまりは当然必要であろう。

今後、地域ごとにまとまったコミュニティが形成され、そのコミュニティ単位で自分たちの地域の個性を理解することができるようになり、より広域な地域レベル(例えば国土レベル)での自分たちの地域の役割を認識すること。地域の連携は、そのようなコミュニティ同士が手を握り合う、理想的にはそんな流れだろう。

しかし、特に、都市地域の市民に対し、地域性を認識してもらうことは相当に難しそうな仕事である。そこで、当面は、中山間地域と都市市民の一員である個人の集まりという関係の連携でもいいのかもわからない。

かつて紹介した「共助研(九州郷づくり共助ネットワーク研究会)」で、中山間地域と都市市民の連携を目的に行動しているが、地域のコミュニティの中に入ってまずその地域の人たちと話し合ったのは、外から目線で、その地域を評価することと、その評価を地域の方に伝えることであった。それまで、自分たちの住んでいるところには何も無いと言っていたおじいさんばあさんたちも、都市市民から見たきれいな川の流れ、春先に咲き乱れる山桜、「お焼」といわれる素朴なおやつの味わい深さ、どれも貴重なものであるということを経験すると、最初は、そんなものかねえという疑心暗鬼なものであったが、それならということで、地元中学生を隊長に「地域探検隊」を結成し、地域の良さを自分たちで見つけようという動きにつながり、今では、自分たちの地域に対する認識は全く違ったものになりつつある。かといって、魅力ある観光地として外から続々人が集まる観光振興のようなことへの発展するような過大な期待を持たせるのではなく、素直に、自分たちの住んでいる生活環境に誇りを持つようになる。実は、表に出して言わなかっただけで、もともと自分たち

の住んで着る環境には満足しているものの、若者が地域を捨て次々に都会へ出て行ってしまうことで、なぜこの生活の良さが分からないのかという忸怩たる気持ちがあったのだと思う。それを掘り起こし、また、地域にいる若者にも、地域の素晴らしさを理解してもらうこと、これは、「触媒」の役割の一つである。また、薄れつつある地域コミュニティを、外部の人間がはいることで、再認識することもできる(外部の人間が参入することを排除することもあるだろう)。

以前、鳥取の中山間地地域支援センターに、活動の視察に行った際に、いわれた「コンサルタントの人は、いつも中山間地域の問題提起に対し、地域振興というバラ色の夢で答えるのは間違いだ。過疎地域は、すでに地域活性化する力のない地域がほとんどで、そのような地域に住んでいる人は、地域振興策より、今住んでいる高齢者の快適な生活支援すること、いわば、地域が若返ることは望んであらず、地域の安楽死策を求めている」と。また、そのためには「立派な振興計画書だけをつくるようなシンクタンクはいらない。地域の生活支援策を自ら汗をかきながら、かつ地域の本音を聞き出すことに心血を注ぐシンク＆ドゥタンク(行動を伴うこと)がほしい」と。

健全な風景づくりを行うためには、地域の自律的な活動が基本であると考えてきたが、これらのことを考慮しつつ、今後も、自律的な地域づくりをするための前提と

しての地域の有り様と、私たちの「触媒」としてのかかわりを、少し整理してみたいと考えている。

【続く】